そして、仕事に専念し、生活や家庭の事をやっていった訳ですね。

二、業のなすもの――会社時代と性格

私は、大正一〇年生まれなんです。一〇人兄弟で、育ち盛りの頃は七人いた。親父は田舎の高等女学校の先生をしていたんですね。今の高校の事ですね。昭和七～八年頃、その頃、月給がおそらく六〇円位だったと思います。月給六〇円ですよ、大変だったと思うんですね。

私は、あまり学校は好きじゃない。本を読むのもあんまり好きじゃない方なんですけど、私の兄弟というのは、みんな頭が良くて優等生ばっかりなんですね。

ところが私だけ、どういう訳なんだか知りませんけれども、何だか優等生になったことがない訳ですよ。（笑）お袋から、

「おまえは、本当にしょうがないねえ。わたしは学校へ行くのが恥ずかしいよ」

と何回も言われてたくらいですから――。

しかし、その頃をよく振り返ってみると、小学校の頃に、よくお袋が私に、

「おまえはおかしな子だよ」

「なぜ？」

「おまえは、法印様みたいな事ばっかり言ってるよ」

そう言われた事を未だに覚えているんですね。しかし、法印様と言われても何が何だか分からなかった訳です。「何かお坊さんの事かな」くらいは思っていた訳ですね。振り返っても中々分かりませんけれども、それらしき事を言ったり、したりした事があったと思うんですよ。

そして、小学校を出て、その上の学校に入って二年生の時に私は、「もうこんな事をやっていても、勉強は嫌いだから辞めてしまえ、必要な時は夜学でもいゝや」と、家を出てしまった訳ですよ。それから一人で生活を始めたんですね。

ところが、自分が家を出て仕事を始め、その後軍隊に行くまでの間、「私は親の世話にはならない」と、何か変なものを持った訳ですね。

やはり、こういうものがあると、大きな歪を造ってしまう元になるんですね。

そして、戦争に約六年間ですね、行って戦地での戦闘の中を通ってきた。

その中で、「もう自分はダメなんじゃないかな」と思う事があったり、「もう自分はどうなっても良い」と思って歩いてみたり、いろんなものを通してきた。

そして、終戦になり、日本に帰って来た。それから、勤め人になって、いろんな仕事をさせて貰うようになった。

帰って来た時に、「一体、人間の青春というものは、何なんだろう?」と、また変な事を考えた訳ですね。

そうすると、何かこう一番大事な青春を楽しまなくてはいけない時なのに、「なんだ、六年間も……おれ一体何やってたんだろう? それじゃ、この埋め合わせをしよう」と、こうなってきた訳です。先ず愚かなものですね。

それから自分で、いろんな事を始めた訳ですよ。この六年間の若さを取り戻さなくてはいけないと思って、やった事はどういうものであったかと振り返ると、これがまた、とんでもない事だった訳ですね。

私は四八歳の時まで、或る会社に勤めていて、そこの会社の営業部長をやっていたんですね。

ところが、小さい時から持っている人間の業というもの——短気という、とんでもないものを私は持っていた訳です。もう一筋縄ではいかない短気だったんですね。

短気ですから、もう自分勝手な事しかやらない訳です。自分が気に食わなかったら、人から何を言われても動かない。

これは、小さい時からそういうものを持っていて、軍隊から帰って来て、ここの会社に入って、辞めるまで短気は直らなかったんですね。

そして、三〇代、四〇代を過ぎて、そこの会社の社長の代わりに、若い社員を集めて仕事をするようになったんです。

この会社は、私が入社した時には七人だったんですね。それが、この会社を辞めた時には、もう七〇〇人位に膨れ上がった会社になっていた訳ですよ。

ところが、仕事をする中で、私はこういう事がよくあったんですね。

会社にお客さんがみえた時に、若い人に、

「あのお客さんは、今日はこんな用事で来たんだよ」
「えー！　ホントですか、そんな事、分かるんですか？」
と、言ったその通りに必ずなるんですね。
それから、例えば仕事中に、若い社員が書類を持って来る。そうしたらその人に、
「あなた、これはこの通りやっていないじゃないの。このようにしなきゃダメだよ」
「…………」
「どうしたの？」
「どうして分かるんですか？」(笑)
——その人が書いた書類を見ただけで、その人が、何をやっているのか、どんな心の持ち主の人か分かるんですね。
若い社員が、私に報告書を出す。使ったお金も書いてある。私のハンコがないと絶対にお金が貰えない。読んでいると違っているから、
「あんた、これ使ってないよ、嘘じゃないの」
「えー！　何でですか」

「あんたね、ホントはこんな処に行って、こんな事をやっていたじゃないの」
「…………！」(笑)
——もうみんな黙ってしまうんですよ。
ところが、そういう事が何故分かるのか、私には分からなかったんですね。
私はこれまで長い間に、若い人達を使って沢山の仕事をやってきた経験から、直感的にそうなるんだろうとばかり思っていたんです。
「私は随分いろんな経験をしたんだなぁ……」と、実は思ったんですよ。その時は、こんなになって（威張った格好をしてみせて）いましたからねぇ。——それはとんでもない思い上がりだったんですね。
そして今度は、自分の短気な部分で、社長としょっちゅう大喧嘩ばかりする訳ですよ、意見の対立で——。何かしら自分がいないと、その会社が将来成り立たないような事を考えている訳です。
で、社長に何か言われると、今度は食って掛かる訳ですね。年がら年中その社長と喧嘩する訳ですよ。「この野郎！」とか、そのうち「きさまぁ！」なんて始まる。

今度は、他所の会社に行って、そこの社長と喧嘩する。終いに椅子を振り回す。(笑)
もうこれは、今考えたら冷や汗が出ますよ。
「うわぁ、申し訳無い事をやっていたんだなぁ……」と思いますね。
その頃は思い上がっていましたから、そんな事平気でやっていたんですね。
そして、実はそこの会社を辞めなくてもいゝものを、辞めてしまった訳ですね。
もう喧嘩ばっかりするから、「ここだけお天道様が照っているんじゃないわ、もー辞めた」ってな事ですね。
それで、最後の日も社長と大喧嘩をして、とう〳〵会社を辞めてしまった。
社長は、「辞めるな」と言って、それまで辞表を何回も突っ返していたんですね。
しかし、終いに、自分の車に荷物を全部積んで、
「もう受け取らないならいゝよ、辞めるよ。もう明日から出て来ないよ」
なんて言って、次の日から会社に出て行かなかった訳です。そこを辞めてしまったんですね……。
これは無責任ですね、若い人一杯いるのに——。とう〳〵辞めてしまったんですね。

そういう元気がいゝ時には、「この野郎」だけで、後の事なんか考えないんですよ。
ところが今度は、自分の事そのものより大変な事になった。
勤めていたこの会社に、私の部下が沢山いたんですね。私が喧嘩して辞めた為に、その人達が大変な動揺をした訳です。その部下の人達が家に来て、
「部長が辞められるなら、私達も一緒に辞めますから、辞表を出してください」
と三十数名の辞表を持って来た訳です。これには私も困ってしまった訳ですね……。
これは、そういう訳にいかないから、よく話をして帰って貰ったんですけど——。
「辞めるのは、私が私自身の事で辞めるんだから、あなた達が辞める必要はないんだよ。あなた達、そんな事をしたら明日からメシ食えなくなるよ」
と言って、漸く思い止まってくれたんですね。
しかし、知らず〳〵のうちに多くの人が、私に一緒に辞めようというような、そんな事を思っていてくれたなんて、本当に有り難いでしたねぇ……。
しかし、そういう事にも気が付かない。自分の事しか考えていなかったんですね。
そして、とう〳〵ここを辞めてしまった。

ところが、人には、「メシ食えなくなるよ」と言いながら、自分の事は忘れているんですね。(笑)

「おとうさん、そういうあなたは、明日からどうするのよ」

って事ですね。(笑) さぁ、大変です……。

振り返ったら、家庭の事なんか、もうさらさら忘れている。自分本位なんですね。面白くないから辞める。思うようにならないから辞める。辞めたら家がどうなるのか、全然考えていない訳です。愚かなものですね。

次回に続く――次回更新予定は、一月中旬頃です。